

平成21年度第3回小平市図書館協議会要録

- 1 日時 平成21年9月24日(木) 午後2時～4時20分
- 2 会場 中央図書館会議室
- 3 出席者 図書館協議会委員：11人(欠席1名) 傍聴者：なし
事務局：中央図書館長 館長補佐兼庶務係長 館長補佐兼調査係長 サービス係長 資料係長 花小金井図書館長 大沼図書館長 計7人
- 4 配布資料 資料については省略させていただきます。
- 5 議題等
 - (1) 報告事項
 - ① 図書館運営状況について
 - ・ 図書館行事等の報告と今後の予定(資料No.1)
(これまでの報告)
7月26日夏休み家族一日図書館員 中央2家族 地区館1家族 申し込みは26家族
8月17日～20日図書館ボランティア講座 参加者延68人
8月19日、26日夜のおはなし会 参加者 大沼50人 花小金井87人
9月3日、10日児童文学紀行講座「絵本で旅するイタリア」
9月17日学校図書館協力員研修
9月19日～「はらだたけひで絵本原画展」
(今後の予定)
10月6日、13日こども文庫講演会「子どもに本の楽しみを伝える」
10月29日児童文学講演会「私の歩んできた道」岩崎京子氏
11月 5日第4回図書館協議会
 - ・ 平成21年度月別貸出状況について(資料No.2)(資料No.3)
貸出資料数が8月末で70万1,767点となり、前年比12,228点増えた。
 - ・ 広域利用市別貸出状況について
東村山市の方の利用が多い。
 - ② 実習生の受け入れについて
市内の中学生のほか私立中学生も受け入れしている。
インターンシップは創価大学、首都大学東京
図書館実習は東海大学
 - ③ 市議会9月定例会について
各会派の代表質問があり、図書館に関するものは2件あった。
・ 「小平市が目指す教育の姿」という質問の中で、仲町公民館・図書館の合築整備について。

- ・マニフェストについて
一般質問では、図書館に関するものは1件あった。
- ・ブックスタートと読み聞かせの支援について

④ ブックリサイクルについて（資料No.4）

今年度も3回行う。

⑤ 行政評価について

行政評価を実施した。ほとんどは問題がないが、障害者サービスについて利用が落ちているものがあった。

<報告についての質疑・応答>

委員 障害者サービスの案内パンフレットはどうなっているのか。障害者サービスの利用低下と関連はないか。

事務局 障害者サービスの冊子は、10月に担当者会議を開き、周知し、11月に配布したい。

委員 学校図書館協力員の研修は年間何回か。

事務局 年間で7回予定している。マニフェストの関連で流動的な部分もある。

委員 具体的な内容は。

事務局 協力員から要望のあった中学生に向く本の紹介、学校図書館システムの利用の仕方、検索の仕方、バージョンアップ後の機能の使い方について周知した。今後はレファレンスの研修を予定している。

委員 出席率はどうか。

事務局 ほとんど全員である。

委員 地域センターの本がだいぶ古い。図書館の本をブックリサイクルに出す前に地域センターに呼びかけるのはどうか。

事務局 図書は置いてあるが、地域センターは別の課が所管している。話はしてみたいと思う。ただ、地域センター設立の趣旨からすると、図書を置くのは目的ではないので微妙な問題がある。蔵書構成などハードルが高い。

委員 ブックスタートについて、3・4か月健診では本のリストを配るだけなのか。

事務局 リストを配ると同時に読み聞かせを行っている。健診の待ち時間に行っているのもので、途中で健診の順番になり、話が途切れたりする状況がある。

委員 待合室に本のリストだけでなく本が置いてあったらどうか。

事務局 図書館から本を持って行っている。そのほか登録の申込書、ブックリスト、地図も持って行っている。議員の話の中心点は、現に本を配るという点である。現在の図書館の立場としては、図書館に来ていただきたいというのが第1であって、図書館で本を配るまでは考えていない。読み聞かせも行っているし、リストも配っているし、親が絵本を選んで読んであげるのがいいのではないかと思う。

委員 ブックスタートは、幼児ではなく赤ちゃんなのか。

事務局 そのとおり。

委員 事業概要に、登録者数は0歳から6歳で2,827人となっている。人口に

対しての登録者の割合はどうなっているか。

事務局 平成20年度で26.2パーセントとなっている。

委員 絵本を配ると120万円必要になる。その費用を保育園、幼稚園に読み聞かせのボランティアの人を派遣するのに使う方が、絵本を配るよりよほど効果的である。

事務局 ブックスタートの考え方は、イギリスから来た考え方で、読書云々ということではない。赤ちゃんとの触れ合いのために、手段として本が使われるということである。育児とか、次世代育成の考え方に近い。図書館としては、本を媒体としているため、図書館にも関係あることになる。議員との話の中では、それだけの費用があれば傷んでいる児童本の入れ替えに使えるなどとも話している。議員の話は、それもこれもということである。現に本が配られないと、それっきりになってしまうのではないかという考え方をお持ちである。

委員 その120万円の予算は図書館からではないですね。

事務局 分からないが、担当課を図書館と見ているので、図書館の中で考えていくことになるかと思う。

委員 ブックスタートについては、それほど効果がないと日ごろ思っている。全然本となじみのない家庭に実物が行くことで刺激になるということでは、一定の効果があると思う。そういう家庭をターゲットにして何か配るという効果的な方法があると思う。生まれたばかりの赤ちゃんには、まず本に入るのではなく、母親が膝の上に赤ちゃんを抱いて子守唄を歌ってあげることから母親と赤ちゃんの交流が始まって、それが1年ぐらいたってだんだんと絵本を与えて読み聞かせをして、本を読める子どもを育てていくということが望ましい。いきなり本を与えてしまうことが、かえって害になるのではないかという気もする。

委員 私の経験から、ブックスタートで2冊の本が配られたが、1冊はすでに家にあった。利用者としてもらえるのはありがたいが、もったいない気がした。0歳児は、本を見てくれない、手遊び歌教室をやった方がよほど効果的ではないか。

委員 沼田市の巡回システムでは、どのような効果があったのかという質問になったのか。

事務局 沼田市では、公民館活動から発展したもので、読み聞かせのグループが公民館の中にあるが活動は限定されていた。そこで学校と協力してボランティアの方が、朝、学校に行き、授業までの時間に各クラスに行き読み聞かせをする。そういう活動だと聞いている。議員の質問では、こういうことを知った上で、図書館で主催しているおはなし会、絵本のへやを出張して学校でできないかという質問だった。

委員 沼田市の巡回システムを加工して小平らしい形でやろうじゃないかという質問だったのか。

事務局 読み聞かせは重要なことなので、少しでも進めたいということである。学校ボランティア関係の方を対象に読み聞かせの講座を開くなど、図書館側もバックアップしていると答弁した。ブックトークについても、依頼があれば学校に

行ってやっているとところもある。

委員 乳児対象にリストを配布しているが、適切な絵本はそんなにあるか。

事務局 幼児を含めてのリストになっている。ブックスタートを奨励している団体は、2年に1回選考会議を開き20冊ほど選び、会社と交渉して安く仕入れている。私ども図書館で作ったリストとほぼ同じような内容になっている。

委員 10数年前イギリスからこの制度が紹介されたときに一番乗り気になったのは、出版社の団体であった。そこで赤ちゃん絵本と称するものが大量に出てきた。質的にどうかという問題点もあった。最初は新しい制度なので自治体に広がったが、今どの程度行われているか分からない。この制度は、図書館というよりも社会教育の問題であり、子ども読書活動推進計画の中で、子どもと本をどう結び付けるのかが大切ではないかと思う。

事務局 全国2,000余の自治体の中で7月31日現在712団体が実施している。子ども読書活動推進についての国の計画で、ブックスタートは、地域との関わりの中での一事例として紹介されている。ブックスタートは、対象の方が多いので職員だけではやり切れない。八王子市では、ボランティアが読み聞かせをしているようだ。

委員 私の経験からすると、一人目の子供のとき、実験した。3か月、4か月では反応なし。反応は1歳を過ぎてから出てきた。そうすると、12か月まではほとんど反応がなく、1歳過ぎからでない絵本に対する刺激は有効ではない。下手をするとマイナスになる可能性もある。ブックスタートの背景には、商業主義、出版社の事情、経営的な意図を持ってスタートさせたという経過があるかもしれない。

委員 運動や制度には、メリットと反対のデメリットがある。メリットだけしか見ないのは具合が悪い。必ずメリットとデメリットの両方を勘案しながら制度や運動を動かしていかないと、誤る場合がある。それを十分に考えながらやらなくてはならない。これは商業資本主義と結びついて出てきた制度が基のところかと思う。何を選んで渡すのかという問題もある。メリットとデメリットを考えながら広く見ていかないと穴の中に入ってしまうことになりかねない。

委員 月別館別貸出者数のところ、仲町と津田が減っている理由は何か。

事務局 津田は窓口の苦情が入ることもあったが、真の原因は両館とも分からない。

委員 事業概要のリクエストの件数について、中央図書館の本が花小金井図書館に行った場合中央図書館の貸し出しになるのか。

事務局 中央図書館の本が花小金井図書館に行き、そこで貸し出されると花小金井図書館の貸し出しになる。

(2) 協議事項

<小平市子ども読書活動推進計画について>

副会長 協議事項に入る。小平市子ども読書活動推進計画について説明をお願いします。

事務局 国や都の計画に準じて作成した。①市内の小平市子ども読書活動推進計画検討委員会で審議し、②学校図書館との連携推進事業研究会議から意見を頂いた。図書館協議会からも意見を頂きながら計画を作成していく。まず、素案を取りまとめ市民のパブリックコメントを受けていく予定である。これ以外に、小平市子ども文庫連絡協議会からは提案を頂いた。よりよい計画の改定をしていきたいと考えている。

事務局 第2次小平市子ども読書活動推進計画の素案原案を取りまとめた。これをたたき台にしてご意見を頂き、より良いものにしていきたい。今まで市内の子ども読書活動推進計画検討委員会を2回、また学校図書館との連携推進事業研究会議を開き計画の説明をしている。第2次の計画は大きな改定ではないが、学校図書館と図書館との連携が大きな点になると考えている。また、乳幼児読書アンケートの中で、おはなし会などの事業が十分に周知されていないことがわかったので、広報活動、情報発信を充実することで利用の促進を図り、家庭での読書活動の推進を図ることが第2次計画の大きな柱になっている。第1章「これまでの成果と課題」、第2章「第2次計画の基本的な考え方」、第3章「推進のための具体的な取り組み」、第4章「実施のための計画」で構成している。

委員 子ども文庫連絡協議会で、小平市子ども読書活動推進計画の改定に当たって提案をさせていただいた。提案は、(1)家庭での本との出会い、(2)地域での本との出会い、(3)図書館での本との出会い、(4)学校での本との出会い、(5)その他の公共施設での本との出会い、(6)子ども読書推進会議について、(7)市立図書館と大学との連携について、という形で構成している。

委員 提案するために、いろいろなところに出向いたが、それで状況が分かってくることがあった。子ども読書推進会議を定期的で開催してくださいと記述したが、5年ごとに振り返るのではなく、定期的に各方面へ関わることで、いろいろなことを見たり聞いたりすることで、結果が違ってくると思う。

委員 子ども文庫の前回の調査の時になかったものに、公共施設の児童書調査がある。この中に社会福祉協議会が行う子どもつどいの広場、子育てふれあい広場がある。子どもつどいの広場は、子どもに本を読ませる場所ではないが、子どもが遊ぶ場所としてその中に絵本や児童書を置いてある。子育てふれあい広場は、主任児童委員が関わって育児相談をしている場所に絵本や児童書を置いてある。人がいて絵本が置いてある所は、それなりの利用がある。

委員 政府でも今までの縦割りの体制から、横断的な連携を図る動きが出ている。図書館は連携をうたっているわけで、今までの縦割り、タコつぼ式のやり方ではなく、横に広がっていく動きを加速させて考えていくのがいいと思う。ブックスタートもそうであるが、運動や制度はメリット、デメリットがある。最後には、基本に立ち返ることが大切である。考えを動かしていく時は、原点にま

で戻ることである。図書館を動かしていく両輪は、人と資料、司書・人材と図書資料、これが車の両輪になって、どちらかが緩むとタガが緩んでいく。司書の力が衰えると、資料の力も衰えるし、資料が悪くなると人も集まらなくなる。悪循環になってくる。資料は選書に結びつき、ブックリサイクルのような廃棄にも結びつく。選書と廃棄はイコールになる。図書館は物を集める所だから、それを捨ててはいかんというのが原則であるが、物理的に場所がないから廃棄をしよう、それで有効に生かそうということでブックリサイクルを行っている。それには司書の目がある。一番重要な作業である。選書と廃棄は司書の力量が問われている。そういう基本のところに戻って考えていかななくてはならない。

委員 図書館のホームページを見ると絵本の表紙が見られるような情報が出てくると便利になると感じた。

委員 学校図書館の図書整備5か年計画に決められた学校図書館図書標準は、小平の場合100パーセント達成しているといっても、活用されてない古いものが廃棄されないで1点として数えられ、冊数として達成している場合が多い。学校図書館の図書整備5か年計画は予算措置がされていて、地方交付税によって交付される。ただひも付きではないからほかのことに使われることもあるようだ。当時の文部省と自治省が話をして予算措置されたが最初の5か年計画で予算が十分活用されてないという実態がある。現在も続いているはずなので、小平としては予算を要求してやっているのか。

事務局 やっている。

委員 最初の数字しか分からないが、第1次で年間1200万から1300万、26校分の資料費がついたと思う。その当時の標準でいくと100パーセント乃至それ以上の達成率だったが、よく調べてみると廃棄されていない結果そういう数字になった。ここで数字が減ったのは廃棄がされたからだと思う。

委員 小平市の小学校のうち図書標準を達成しているのは42.1パーセントだが、この中にも廃棄すべきものを含めての数字ではないかと思う。

事務局 文部科学省は新学校図書館整備5か年計画で廃棄図書を更新するための図書費を盛り込んでいる。学校と学務課との調整になるが、全校のレベルでの共通認識の中で廃棄したり購入したりしてできるだけ早く約100パーセントに近づけて行きたいという意欲を持っている。

委員 使わなくなった本は、地域で保存図書館をつくり、そこに置いておくのがいいのではないかと前から言っている。実際には使わないが、100年たって誰か一人使うという本はある。たとえば教科書の歴史を見ようとする人がどこかにいけば昔の教科書が見られる。どこかにあればいい。現代の世相を見るには学術書では見られない。100年後にキムタクは学術書には書いてない。週刊誌を見なくてはならない。そうすると週刊誌がないとキムタクは分からない。江戸時代でも草双紙、赤本、青本、黒本、今でいう漫画の源流になっているが、これは消耗品で皆が見てとっておかなかつたから、ほとんどなくなっている。今、それを調べようとするの大変な労力が必要になる。だから、廃棄は喜んで

やるものではない。

委員 私の経験からも多量の蔵書を抱えて困ったことがあった。また、国会図書館では、2011年からネット配信で400万冊が有料で見られるようになる。こういう時代になった。キャパシティを増やすにはお金がかかるので、増やせない時はどのように廃棄していくのか合理的に考えなくてはならない。

委員 小中学校の学校図書館に係ることなのですからごく重要だと思う。まず、廃棄基準を作ることが重要だと思う。学校に大勢のボランティアが入った時期があり、学校図書館の本を整理するのを手伝ったが、「ソ連」というものがある本が残っている。段ボールに集めたが、廃棄していいかわからず、何となく倉庫に入れておくということが過去にはあった。現在は、どうなったかわからないが、その辺を整理しないと図書標準を達成したが中身がないことになってしまふ。ぜひ廃棄基準を作ってください、残念ながら置いておけないあるいは小・中学校の子どもが使わないということなら、寄贈するなりして、廃棄していただき、新しい本を購入する方向にしないといけない。

委員 廃棄基準の公開は、公共図書館でも学校図書館でも言われていることで、まず廃棄基準があることが大前提でそれで公開ということになる。学校図書館の標準をある程度達成していることは蔵書新鮮度がクリアできていることで、廃棄はかなりできている、数的にはきちんとされている。まず、廃棄基準を作ること、それを公開することを強調していただきたいと思う。さらに、学校図書館の図書整備5か年計画の学校図書館の図書整備費が、どのくらい小平にきているかという話をこの中に含めた方がいいのではないか。また、携帯小説の表記はカタカナで「ケータイ小説」の方がよい。

委員 読書指南役とはどういうものか。

事務局 東京都の子ども読書活動推進計画の2次計画に取り上げられている。今年の3月、学校の司書教諭、指導主事、各教育委員会に東京都が第2次計画の説明会を行ったとき、指導主事から読書指南役について質問があった。これは子ども一人ひとりの状況に応じて、読書指導をするため司書教諭あるいは指導する立場の人になるものだという説明があった。9月になって東京都から読書指南役の研究校を募集するという通知があった。この研究活動を見守り、小平市ではどのように取り入れることができるのか研究していきたい。不読者と言われる本に手を伸ばさない子どもにどう手を差し伸べるのが重要になっている。それを東京都はこういう形で表わそうとしていると考えられる。

委員 第3章家庭における読書活動の推進、ここが一番大切ではないか。読書環境をどうつくっていくか、もう少し具体的にどう仕掛けを作っていくか記述した方がいい。具体的な施策がどの程度できるのか分からないが、一番大切なのは、家庭における読書環境をどう作っていくか、母親、父親にどう目覚めてもらえるかだろうと思う。自分で本を読まないのに、子どもに本を読めと言っても駄目だろうと思う。ぜひ具体的な形で書けるならという気がする。

委員 抽象的な表現ではなく具体的なことを入れて書いていくのが原則になる。その方が分かりやすく意味も取りやすい。

委員 提案書の終わりに公共施設の児童書調査がある。本の冊数は施設によって大きな差がある。これは管理者の考えが出ている。地域センターは嘱託職員のみでありなかなか難しい。公共事業の施設での本に対する考え方に大きな差がある。地域格差が出て、サービスにばらつきが出る。

委員 地域センターとは何ぞやということを説明いただかないと、本を読む場所ではないので、地域センターで本が読めるのかと、調べに行ったときに感じた。あればいいという気がする。地域センターは18館が同じでなくともいいと思っており、地域によって子どもの利用が多いところ、お年寄りの利用が多いところで地域センターによって特色があっている。調べた限りでは古くて、壊れてしまった児童書が多いということは問題があると思っている。本の冊数も地域センターによって違ってもいいだろうと思っている。

委員 要素の一つではあるが、それを重視するかしないかは、地域の特色であると考えてもいいのではないか。図書館には司書がいて専門に本のことを考えているが、地域センターでどこまでできるか、常々思っているところである。

委員 地震のときに図書館で書棚が倒れて死者が出たと新聞で見た。地震への対応はどうなっているか。

事務局 仲町は古い形式なので、つかえ棒で対応している。

委員 小平の小・中学校の耐震改造は、平成9年にスタートし、今年終了する。全部で30億くらいかかった。公共の図書館を含め耐震診断をしているのではないか。

事務局 小・中学校の耐震診断は、最優先でやっていて、今後は社会教育施設ということだが、社会教育施設にもいろいろあり、次は防災拠点としての公民館を中心に行うと聞いている。

委員 図書館は対象外なのか。

事務局 図書館については、耐震についてすぐにはやらない。公民館は、炊事ができる施設があるので、避難場所として拠点化を考えている。新規に建てる図書館については耐震について考慮している。

事務局 花小金井は書棚がスライドして免震するような形になっている。震度4位だと揺れる方向にもよるが作動している。震度5.5以上は経験してないので分からないが、震度4程度では大丈夫である。ただ、書棚は大丈夫であるが、本が書棚から飛び出すのがどうなるか分からない。耐震化は、拠点としての社会教育施設と、保育園について行っている。

委員 柏崎の市立図書館も東北大学も地震の後、書棚から本が飛び出してひどい状況であった。

副会長 次回までによく読み込んでいただき意見等を出していただきたい。